

# 問題提起ないしは研究計画\*

泉 正樹†

これまでの研究テーマ

現前の経済現象を資本主義経済の一類型として捉え、そうした 現われ方 を可能にする、ありべきあらゆる型の資本主義経済に通底する原理がどのようなものになるだろうかという問題を考えてきた。

たとえば、商品経済における貨幣の論理的な出自を商品交換そのもののうちに求める場合、貨幣は必然的に商品世界にそもそも存在する商品が貨幣機能を果たすという、商品貨幣説に帰結することになると考えられる。この点についてマルクスは、「貨幣は生まれながらに金銀である」( *Kr.S.*131 ) と論じたのであった。

報告者も、商品交換を媒介する貨幣の論理的な初発の起源は、諸商品の交換過程に存するだろうと考える。その意味からすれば、報告者は 貨幣の生まれは金銀 と理解する。しかしながら、貨幣が「生まれながらに」金銀であり、金銀(貨幣商品)との関係が切断される貨幣現象はありえないかどうか、この点については検討の余地があるだろうとも考えた。その際、円 という貨幣単位が 一定量の金を意味する というのではなく、円は円を意味する という規定に貨幣法の改訂が行なわれた点に注目した。現実の貨幣現象において、一般的等価物を見出せない貨幣単位の出現を可能ならしめる原理的な根拠が存するのではないかと着想した。

現実の商品世界では、1kg の茶の価格は 10g の金というのではなく、そこには価格単位が介在し、たとえば 1円 = 1g の金 という度量標準が定められることによって、1kg の茶の価格は 10円というかたちで商品の価格は表示されることになる。その際の一つの問題として、価格単位の制定という国家に代表される統治機構の介在が、どこでどういう論理によって商品貨幣説に接続されるだろうかという点考えた。

また、仮にそうした論理的な接続が行ないうると考えられるとしても、現代の貨幣単位が端的に示す貨幣商品と切り離された貨幣現象を生み出す萌芽を、商品貨幣説のうちに見出すことができるだろうかという問題は残される。この点についての考察も行なってみた<sup>1)</sup>。

そうした考察を経て、貨幣そのものは一般的等価物というよりも、一般的等価形態として捉えられることになるのではないかと考えるに至った。そしてそのように貨幣を捉えようとする際には、商品価値の内在性を想定せざるをえないだろうとも考えるようになった。

---

\* 2006 年度原論ゼミ初回(2006 年 4 月 7 日)。

† 経済理論学会会員 (cxe02417@nifty.com)

1) この問題についての考察は改めて報告させて下さい。

## 問題提起ないしは研究計画

そうとすると、では商品価値とは何かという問題を考えざるをえないことになる。この点についての研究を集中的に進めていくことを、今年度ないし来年度もしくはそれ以降の研究方向の大枠にしたいと考えている。ただ、価値 についての研究は膨大な蓄積がなされているのであり、どこから手を付ければよいのか考えあぐねていることもまた事実。以下にひとまず現段階での着想を箇条書きにしてみる。

- 価値なるもの を考えざるをえない状況とはどのような場合か？
- そもそも商品には価値が内在しているのかいないのか？
- 商品に価値など内在していないが、内在しているように見えるのか（じつは無いのに、在るように見えるのか）？
- 商品に価値は内在しているが、内在していないかのように分析されてしまったのか（じつは在るのに、無いことにされたのか）？
- 商品に価値が内在するというとき、それはどのような意味で内在しているか（客観的に内在しているのか、主観的に内在しているのか）？
- 価値の内在性を主観的に捉えてみるとき、その 主観 は客観性とは無縁のものか？
- 主観とか客観とは何か？

これらの論点を具体的に考察していく題材として、スミスの同感論に取り組んでみたいが、具体的な方向性・草稿などはまだない。これから考えていく。このように 価値 について考察を行なってみることによって、たとえば「過程を進みつつある価値」( *K.I.S.*170 ) とか、「価値の増殖」( *K.I.S.*167 ) と論じられる「資本」について、何ほどかの理解を深めたいと考えている。

また古銭学 ( numismatics ) に関心もあるが、まずは 価値 について考えてみたい。